

なつかしさにつながっている

——現在の否定としての妖怪の存在理由

菊地 章太

1 「今」を否定する存在

妖怪は私たちが知っている生命体のなかに分類できない。そればかりか、今の時代に私たちが普通にいただく価値観のなかにも入っていない。むしろ私たちの価値観を変えてしまうもの、常識に疑問を突きつける存在と言えるかもしれない。普段は人並みに常識を重んじたいと考える。だがいつもそうとばかりも言えない。既成の秩序や安穏な常識に反してみたくなるときもある。現代社会をかたちづくるものへの破壊衝動が私たちの心のどこかに隠れていたりする。

そうした「今」を否定する存在というのは、どこから来るのか。

二つ考えられる。ひとつは未来から来る。もう一つは過去から来る。

宇宙人は未来からやって来るタイプである。空飛ぶ円盤のイメージはいつだって近未来型である。しかし、妖怪はちがう。その反対である。過去からひょっこり出てくる。ひと昔もふた昔もまえの世代を体現している。だからこそ、かえって今を否定することができる。現在の秩序や常識をくつがえす別の価値観をたずさえているのである。

今風の妖怪もいてよさそうだが、たいていはどれも古風な姿をしている。古い寺や屋敷にひそんでいたりする。座敷童などは着物姿で、髪型はおかっぱとイメージされている。なんとも郷愁にあふれた姿ではないか。それはふるさとにつながっている。子どもの頃、田舎の奥座敷がこわかった。そんな記憶と結びついている。

もちろん目に見えるものへのなつかしさばかりではない。過去の価値観、あるいは昔ながらの感覚への郷愁もあるにちがいない。そうしたことを西洋の森の伝説からはじめて、日本の妖怪現象との比較をまじえてたどってみたい。

2 夜の墓場で踊る娘たち

ドイツの詩人ハインリヒ・ハイネは1835年に亡命先のパリで、故国の民間伝承に関する文章を発表した。ヨーロッパの不可思議な生き物、つまり妖怪の本質に迫った内容である。ユダヤ人のハイネはプロテスタントに改宗したものの、教会やドイツ社会への批判を繰り返したあげく国外に亡命した。最初にフランス語でこれを

執筆し、翌々年には『精霊』のタイトルでドイツ語版も出版された。

ヨーロッパの古代世界を支配していた神々は、キリスト教が浸透するにつれて徐々に周辺へ追いやられていった。その痕跡は民間信仰のなかにどのようなかたちで残っているのか。それを探るのがハイネの書物のめざすところである。

かつてゲルマンの大地を闊歩していた異教の神々は行き場を失い、今や魔物に身をやつて森にひっそり暮らしているという。キリスト教という陰気な精神文化がヨーロッパを覆い尽くしてしまった。かつてその地に満ちていた生命の輝きをたたえた世界は歴史の背後に退けられたのである。

ヨーロッパは森に覆われている。「黒い森」や「黒い谷」という地名がそこかしこにある。夜が来れば森も谷も漆黒の闇に閉ざされる。群れ飛ぶカラスにまじって、何やらあやしげな生き物がひそんでいる。そんな話を人々は語り継いできた。魔物だけではない。森には妖精や小人がいるかもしれない。

ドイツ語で「黒い森」を意味するシュヴァルトツヴァルトの村々で毎年カーニバルが行なわれる。村人たちは奇妙な仮面をかぶって祭に参加する。昔の神々も今はこんな姿に変わり、すっかり落ちぶれてしまった。彼らの物語は伝説や昔話のなかに埋もれている。だがそこには、古代の神話の世界がゲルマンの森で姿を変えながら息づいているのだろう。

ハイネの『精霊』のなかにヴィリスの伝説が出てくる。オーストリアのある地方の話として語られている。ヴィリスの名は地域によってさまざまである。クラシック・バレエの名作『ジゼル』には、フランス語でウィリという名で登場する。

ヴィリスは結婚前に亡くなった娘たちの亡霊である。気の毒な娘たちは墓のなかで静かに眠っていることができない。夜中になれば墓から出てきてみんなで踊る。真っ白な花嫁衣装をつけて月の光をあびながら踊りつづける。生きているあいだにたくさん踊ることができなかった。その分を死んでからあと取り戻そうとするのか。そこへ出くわした男は運の尽きである。ヴィリスたちに囲まれて死ぬまで踊りつづけることになる。

ヴィリスが次々と墓から出てきて踊りを繰り広げる場面がバレエで表現される。雪のように白い娘たちが薄明のもとで乱れ舞う。この世のものとも思えないあやしい美しさである。それでもこの娘たち、墓場妖怪にはちがいない。

『ジゼル』は死んでヴィリスとなっても恋人を愛し続ける娘の物語である。1841年にパリのオペラ座で初演された。原作者のテオフィル・ゴーティエはハイネの書物に出てくるヴィリスの話からヒントを得ている。ちょうどこの時代にトウシューズをはいて爪先立ちで踊る現在のバレエのスタイルが確立された。深い森のなかで月の光を浴びて浮かびあがるヴィリスの姿は、まさにそのイメージにかなっていたのである¹。

¹ Mathias Auclair et al. *Image de la danse*. Paris: Bibliothèque nationale de France, 2008, pp. 40–42.

3 死後も楽しませて

『ジゼル』は二幕物のシンプルなストーリーである。

第一幕の舞台は中世ドイツのラインラントの山あいの村である。そこは森に囲まれている。村の娘ジゼルは踊りが上手だった。森番のヒラリオンがジゼルに思いを寄せている。だがジゼルは村に来たばかりのロイスに夢中である。ふたりは花占いをして語り合う。ところがこの男、村を見おろす城の領主の息子である。遊び心で村の娘と仲良くしているだけだった。嫉妬したヒラリオンがロイスの正体をジゼルに明かしてしまった。だまされていたことを知ったジゼルは悲しみのあまり気がふれてしまう。そして踊りまくったあげくに命を落とす。ここで第一幕が終わる。

第二幕の舞台は森のなかの夜の墓場である。結婚前に死んだ娘たちがヴィリスになって墓場から出てくる。ヴィリスの女王が登場して踊りがはじまる。ヒラリオンがジゼルの墓に花を供えに来たが、何やらあやしい気配を感じて逃げ出してしまう。ところが最後はヴィリスたちにとりかこまれて命を落とすのである。

ヴィリスが集まって踊るなか、ジゼルも彼女たちの仲間入りをした。そこへ花束を持ったロイスがやって来た。ロイスは女王につかまってしまう。死ぬまで踊りつづけるさだめとなる。ジゼルは死んでもなおロイスを愛していた。自分をだました男なのに、それでも彼女は愛しつづけていた。ふたりは重なりあって踊る。そのうち朝が訪れる。ヴィリスはみな墓に戻らなければならない。ロイスの命は救われた。そのときはじめてジゼルの本当の愛を知ったのであった。

いったいどこからこんな物語がつむぎ出されたのか。

ハイネは述べている。今から花を咲かせようという、そのまっさかりに世を去った娘がいたのだろう。そんな娘をあわれむ人がきつといたのだと²。娘たちは生きていたに存分に楽しむことができなかった。手にすることのなかった喜びを亡くなった後までも探し求めている。せめても十分に楽しませてやりたい。楽しく踊らせてやりたい。そうした思いがあったのかもしれない。

バレエ作品には森を舞台にした物語がいくつもある。『白鳥の湖』もそのひとつである。悪魔ロットバルトの魔法で白鳥に変えられた王女が主人公である。悪魔といってもキリスト教のそれではない。魔物といった方がよい。はるか昔からヨーロッパにいた得体の知れない何物かである。それがキリスト教という強力な宗教の普及によって行き場を失い、闇に暮らす身となった。ハイネのいう妖怪の成り立ちにふさわしい。のちほど述べるとおり、ケルトやゲルマンの世界では聖樹信仰もさかんであった。森は異教とつながっていたのである。

ヴィリスは自殺した娘の霊、あるいは臨終の祈禱を受けられなかった娘の霊とも考えられている。生前に浮き名を流した罪の報いで、虚空をただよう罰を与えられ

² Heinrich Heine. *De l'Allemagne*, II. Paris: Éditions du CRNS/Berlin: Akademie-Verlag, 1978, p. 45; id., *Elementargeister*, Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke. Heinrich Heine. Bd. 9. Hamburg: Hoffman und Campe Verlag, 1987, S. 19.



オギュスト・ジャンドラ画「ヴィリス」によるリトグラフ、1850年
(Mathias Auclair et al. *Image de la danse*. Paris: Bibliothèque nationale de France, 2008, p. 47.)

たともいう。その姿はたとえようもなく美しく、ひとたび姿を見た者は、人間の女では満足できなくなる。土地によっては魔女か、あるいはラミアすなわち女の吸血鬼と伝えられている³。

³ Heine, *De l'Allemagne*, op. cit., p. 45; id., *Elementargeister*, op. cit., S. 20.

4 伝統と秩序を破壊するもの

吸血鬼を意味する英語のヴァンパイアはもともと英語圏にあった言葉ではない。ロマンス語圏やゲルマン語圏にも類似する言葉は見あたらない。つまり西欧には吸血鬼の伝承がなかったのである。スラブ語圏から入ったとされており、したがって吸血鬼は東欧原産ということになるだろう。そこにはこんな言い伝えがある。

村のある家で人が亡くなった。しばらくして、死んだはずの人が夜な夜なあらわれ、眠っている人の血を吸う。そんな噂が立つ。墓を掘り起こしてみると遺体は腐敗していない。まるで生きている時のように血色がいい。夜中によみがえって人の血を吸ったからだとか誰もが考える。そこで死者の心臓を杭で突き刺し、遺体を焼いてその灰をまき散らす。そうすればもう復活できないという⁴。まるで迷信そのものだが、つい百年前のヨーロッパの田舎ではまだこうした吸血鬼の存在が信じられていたのである。

遺体が腐敗しない理由はいくつかある。地面に石灰分が多量に含まれる土地では、腐敗が進まず埋葬された遺体が原形をとどめることがある。エーゲ海の島々がよく知られる。それが悪魔か吸血鬼のしわざにちがいないと人々は考えた。輸血などという知識のない時代である。他人の血を吸えば生気がよみがえると信じられていたのだらう。

ドラキュラの名のもとにはルーマニアのトランシルヴァニアにあるが、かの地の言い伝えをもとにした物語が19世紀のイギリスで書かれた。世界に冠たる大英帝国の時代である。その世紀が終わろうとする頃、東欧のかなたの古い伝説が装いも新たな怪奇物語となって人々の心を捕らえたのである。

大英帝国はすでに繁栄の絶頂期を通り越している。閉塞感が充満しつつある。それでもなお社会の根底には厳然たる秩序があり、牢固な倫理観が支配していた。その裏側で、不条理な、猥雑な、野蛮な世界がひそかに求められ出した。そんな時代にドラキュラは登場した。伝統と秩序を破壊する存在として登場したのである。

伝統と秩序を破壊するとはいうものの、ドラキュラは革新的なリーダーではまるでない。むしろ懐古趣味のジェントルマンである。古びた館に住んでおり、棺桶などは年代物である。十字架や聖水に弱いというのもなかなか古典的である。なぜそんな御仁が伝統と秩序の破壊者になったのか。

この場合の「伝統と秩序」が具体的に何をさすかという、それは大英帝国の「今」につながる伝統と秩序である。彼らの「今」をかたちづくっているところの伝統と秩序に他ならない。しかしそんなものはいい加減うんざりだった。身動きもとれず息苦しくてたまらない。この圧迫状態をひっくり返して「今」を否定してくれる者があらわれないか。そんな危険な存在を人々はどこかで期待していた。これはもしかしたら人間の心の安全装置なのかもしれない。

⁴ Jean Marigny. *Sang pour sang: Le réveil des vampires*. Paris: Gallimard, 1993, p. 27.

過去からあらわれ、現在を否定する。ドラキュラはその典型である。ジゼル舞台が中世の村であったり、ヴィリスが伝統的な花嫁衣装で登場することも思い出される。

そうした目に見えるものだけには限らない。見えないものへのなつかしさもあるにちがいない。ここで話題を日本に転じてみたい。

5 因果にからめとられる話

三遊亭圓朝の『真景累ヶ淵』は明治の古典落語の名作として知られる。江戸時代のはじめに下総国羽生村（現在の茨城県常総市）で起きた累の怨霊事件を下敷にした物語である。累の騒動は幕末にいたるまで世に知られていた。今では四谷怪談のお岩さんのかげに隠れてしまったが、かつては怪談といえば累がその代名詞だった。だからこその事件を踏まえた創作物語を人々も歓迎したのである。

鶴屋南北の『東海道四谷怪談』の初演は文政8年（1825）である。江戸も終わりに近づいたころの作品である。『真景累ヶ淵』の初演はこれに遅れて安政6年（1859）である。ほどなく維新の世を迎えようとする時代である。そうした時代に、よりによって因果のさだめからめとられ、身動きもできずに落ちていく人間の姿が描かれている。

圓朝20歳の作である。もとは小道具を用いたいわゆる道具話だったが、明治になって扇子一本の素話に移した。今の落語と同じスタイルである。圓朝は人情話のもとより、この『真景累ヶ淵』や『牡丹灯籠』などの怪談も得意とした。どれも高座で演じたままの速記で伝わっている。明治憲法のもとで国会が開かれるに際し、速記術が開発された。その賜物である。

速記本は明治20年（1888）9月から翌年1月まで『やまと新聞』に連載された。『真景累ヶ淵』という題名はこのときに付けられたという。「真景」は「神経」をもじったものである。連載終了後に単行本として出版された。その冒頭にいう⁵。「今日より怪談のお話しを申上ますが、怪談話しと申すは近来大きに廃りまして、余り寄席で致す者も御坐いません、ト申すものは、幽霊と云ふものは無い、全く神経病だと云ふ事に成りましたから、怪談は開化先生方のお嫌い成さる事で御坐います」とある。

ここには幽霊など神経の錯覚だと主張した「開化先生」というのが出てくる。これは文明開化の世にあって啓蒙に邁進した人々のことである。妖怪研究の先駆者である井上圓了は、さしずめその代表格であろう。妖怪迷信説を声高に主張していた時代であった⁶。

⁵ 三遊亭圓朝「真景累ヶ淵」延広真治校注『落語怪談咄集』新日本古典文学大系明治編、岩波書店、1989年、7頁。

⁶ 拙著『妖怪学の祖 井上圓了』角川選書、角川学芸出版、2013年、61頁。

この落語が最初にできたのは圓了の生まれた安政5年（1858）の翌年だが、話はその後いくども練り直されている。とくに上に引いた枕の部分は聴衆に応じてその都度変わっていく。今活字で見る文章になったのは明治のなかばだから、まさに圓了活躍の最初期にあたる。

すでに開化の世を迎えていた。そんな時代に前近代の因果応報話が今さらながら好評を博したのである。

6 江戸時代の怨霊事件から

『真景累ヶ淵』にはもとになった事件がある。

元禄3年（1690）刊行の『死霊解脱物語聞書』に事件の顛末が記されている。下総国羽生村に累という女がいた。「顔かたち類ひなき悪女にして、あまつさへ心ばへまでも、かだましきゑせもの也」という⁷。容貌も性格もよくない。そこへ与右衛門という婿が来た。これまた田畑目当てのろくでもない男である。

夏の夕暮れだった。夫婦は畑仕事を終えて家路に着いた。鬼怒川の橋にさしかかったときである。与右衛門は累を川に突き落として命をうばった。そのあと嫁をもらうが、次々と死なれた。何度目かの嫁にようやく娘が生まれる。するとその娘に累の霊が取り憑いた。死霊が憑依したのである。そういう事件が今から三百年あまり前に江戸の近在で起きた。

羽生村はしばらく前までは水海道の一村だった。古い表記は御津海道である。鬼怒川の津、つまり船着場だった。物資が流通し人が行きかう土地である⁸。その繁華な土地の片隅で悲劇が起きた。それが落語の『真景累ヶ淵』の背景になっている。ストーリーそのものは圓朝の創作であり、因果がめぐりめぐって幾重にもふくれあがる仕組みである。累が殺された淵へたぐり寄せられるようにして悲劇が展開していく。

最初の舞台は江戸である。旗本に斬り殺された按摩の娘豊志賀とお園、乱心して成敗された旗本の息子新五郎と新吉が主人公である。四人は互いの身の上を知らずに出会い、そして恋に落ちる。けれども、忌まわしい因縁を背負った男女である。新五郎はお園に言い寄ったあげく、誤って女をあやめて獄門にかけられる。豊志賀は新吉の不実がもとで怨みを吞んで死んでしまう。新吉は若い娘をつれて累ヶ淵のある羽生村へ逃げていく。そこでまた悲劇が繰り返されていくのである。

この物語のテーマは何か。不条理な何物かが人々を支配している、つまりは因果がめぐっていることではないか。親の代から積み重なって消すことのできない因縁に引きずられている。それに関わるすべての人が、がんじがらめにからめとられて

⁷ 高田衛校訂『近世奇談集成（一）』叢書江戸文庫、国書刊行会、1992年、334頁。

⁸ 柳田國男「水海道古称」『民間伝承』第15巻3号（1952年）；『柳田國男全集』第32巻、筑摩書房、2004年、199頁。

いく。目に見えないさだめのなかに、あらがうこともできずに落ちていく。そういう不条理な世界、迷信にあふれた物語が、文明開化の時代においてもなお人々の心を捕らえていた。

7 自分の幽霊を背負う

圓朝は幽霊の絵をさかんに蒐集した。墓のある谷中の全生庵に一部が所蔵されている。百物語のために百幅そろえようとした。百物語は幕末に流行した怪談話の会である。維新の世にいったんは衰退し、迷信撲滅の反動のゆえか、明治末年に復活した⁹。

井上圓了の大学時代の恩師アーネスト・フェノロサが圓朝を訪れた。幽霊画コレクションを見せてもらうためである。『圓了隨筆』に記事がある。「落語家圓朝は幽霊の図画を集めて百幅の多きに及べり。米人『フェノロサ』氏圓朝に請て之を見、問ふに幽霊の有無を以てす。圓朝曰く幽霊は有りと思ふ人には有り、無しと思ふ人には無しと。『フェノロサ』氏曰く実に然りと。圓朝よく幽霊の理由を知るが如し」とある¹⁰。

フェノロサは幽霊はいるかいないかと問うた。幽霊はいると思う人にはいる、いないと思う人にはいない。これが圓朝の答えである。それを伝え聞いた圓了もまた、圓朝は幽霊の本質をわきまえていると感服した。

『真景累ヶ淵』にいわく、人を殺して物盗りをする、そんな悪事を働くような人間にはかならず幽霊がついている。「是が即はち神経病と云つて、自分の幽霊を背負つて居る様な事を致します」という¹¹。圓朝もじつは圓了に劣らずドライである。ただ違うのは、「幽霊を背負つて居る」というその迷いが人に及ぼすものを、割り切って排除するか、それとも人生の大事と思うかである。

迷妄にはちがいない。迷妄を切り捨てていくことが近代人のあるべき姿勢だろう。しかしそんなものにさえ、迷い、惑わされてしまうところに、かえって人としての弱さとまことがあるのではないか。

割り切ることは大事である。しかし割り切れないことのなかに、ときには真実がこもっている。迷信であることが明らかになった時代に、それをもとに戻すことなどできない。とは言え、たとえ迷信だとしても、切り捨ててしまうかどうかは別問題である。迷信にだまされる。そんなことが生きていくうえで大事な時もある。圓朝は人情話の大家だけあって、市井に生きる庶民の感覚に寄り添ったのだろう。

幽霊がついている。そんな迷いをきれいさっぱり捨ててしまうか、心に背負いつづけるか。ここが分かれ道である。幽霊など神経の錯覚にすぎない。それはそうだ

⁹ 一柳廣孝・近藤瑞木『幕末明治百物語』国書刊行会、2009年、263頁。

¹⁰ 井上圓了『圓了隨筆』哲学館、1901年、114頁。

¹¹ 『落語怪談咄集』前掲書、9頁。

としても、そうしたものにさえ捕らわれてしまうときがある。それが私たちの本当の姿ではないか。それは圓朝の時代だけのことではおそくない。

8 葉のささやきが聞こえる

「王子装束の木大晦日の狐火」と題する版画がある。東海道五十三次の連作で名高い歌川廣重が描いた。『真景累ヶ淵』初演の2年前の安政4年（1857）の作品である。維新のわずか8年前である。時代はほどなく文明開化を迎える。やがて街にはガス灯がとまり、電灯が普及していく。だがそれは都会の話である。日が暮れてしまえば、村の夜はまっくらだった。版画のなかで狐が松明を口にくわえて集まっている。そこには闇夜のあやかしの世界が、なおも人々の日常を支配していた。

スタジオジブリの『もののけ姫』に「こだま」という森の精が登場する。実在の生き物ではなさそうなので、やはりこれは妖怪であろう¹²。物語のなかに壮大な森があって、そこに「こだま」があふれている。その森は生命にあふれていた。ところが人間の身勝手な行動のせいで森が減びそうになる。そのとき「こだま」が次々と死んでいく。森がなくなってしまうと「こだま」は生きてくことができない。だが、やがて自然の大いなる力によって森はもとの姿を取り戻していく。するとまた「こだま」も少しずつ生き返ってくる。

自然が生きているところに妖怪も生きている。そうしたメッセージを読み取ることもできそうな気がする。

ふたたび西洋にもどってみれば、そこでも妖怪は森に生きているものが圧倒的に多い¹³。ヴィリスもロットバルトもそうだった。ドラキュラはトランシルヴァニアの出身だが、シルヴァはラテン語で森を意味する。トランシルヴァニアは「森のかなた」の地なのである。やはり深い森に埋もれた館に住んでいた。

2010年9月のことである。バルト海に面したエストニアのある町で大きな樫の木が切り倒された。ひと月まえの嵐で、ふたまたに分かれた幹の片方が折れてしまった。木の内部が枯れていて危険であった。そこは領主の館の跡地で、今は学校が建てられ、庭は公園になっている。生徒や住民の安全のために伐採が決まったのである。

樹齢は二百年だという。伐採の日に別れの式典が行われた。町長が挨拶したあと、学校の先生が木に向かって語りかけている。その様子はエストニアのニュースページに掲載された写真と動画で見ることができる¹⁴。

これは聖なる木であった。やむをえず伐採することになったが、おごそかな式典

¹² 「こだま」については本書所収の木場貴俊氏の論考を参照されたい。

¹³ 拙著『妖怪たちのラビリス—西洋異界案内』角川学芸出版、2013年、18頁；同『魔女とほうきと黒い猫』角川ソフィア文庫、2014年、67頁。

¹⁴ <http://www.kylauudis.ee/2010/09/16/kiltis-langetati-augustitormis-viga-saanud-puha-tamm>.

を催して木に別れを告げた。誰もがこの木に願いごとを祈ってきた。悩みごとを吸いとってくれる木として頼みにしてきた。そこに精霊がやどっていると人々は信じてきたのである。

エストニアの国の紋章は青い三頭の獅子をかたどり、金色の樅がそれをとりまいている。ヨーロッパの町の紋章には周囲に樅の枝葉をあしらったものがすこぶる多い。樅が頑丈な木であるのにあやかり、町が堅固にたもたれるのを願ったのだろう。しかしそれだけではない。ヨーロッパの神話とも結びついている。

樅は森の木の中なかでもひとときわ背が高い。そのため落雷に遭いやすい。ギリシアの神々の王ゼウスは雷の神である。その神木は樅とさだめられた。ゼウスの神域であるトドーナの森の神官は、樅の葉のささやきを聞いて神託をくださったという。ここには神殿はなく、樅そのものがゼウス崇拜のシンボルになっていた。

ゲルマン神話の首領オーディンの息子のトールも雷の神である。やはり樅を神木としている。ゲルマン民族はこれをもっとも神聖な木としてあがめてきた。8世紀に彼らの土地にキリスト教を伝えた聖者ボニファティウスは、トール神にささげられた樅の木を切り倒した。雷鳴がとどろき木々はなぎ倒されたが、雷は聖者の上には落ちなかった。これを見た人々はこぞってキリスト教に改宗したと伝えられる¹⁵。樅の切り株から樅の若木があらわれた。それからゲルマンの民は樅をクリスマスに植えるようになったという。

9 見えないものの時代は終わった

ハイネは『精霊』のなかで語っている。「信仰の斧にあらがった聖なる樅の木は冒瀆された」と¹⁶。毎夜この木の下で悪魔どもがばか騒ぎをし、魔女がそろってみだらなことをする。そんな噂を立てられた。しかし樅の木こそはドイツを象徴するものである。それは森でもっとも大きく強い木である。根は大地の底まで達し、梢は空を覆う。葉かげには妖精たちがやすらっている。

夜が明けそめるころ、人はまだまどろみのなかにいる。深い緑に覆われた森の奥で、木々にこもる妖精たちがたわむれているのかもしれない。小さな笑い声が朝霧にまぎれて聞こえてきそうだと。

森の聖なる木は鳥や獣やさまざまな不可思議な生き物までもやどしてきた。その末期を壮大に語った物語がある。アンデルセンの童話「年老いた樅の最後の夢」である¹⁷。

夏が来た。森に古い樅の木がそびえている。すでに三百歳を超えていた。木のま

¹⁵ Wilhelm Levison, ed. *Vitae sancti Bonifatii archiepiscopi Moguntini*, *Scriptores rerum Germanicarum*. Hannover: Impensis bibliopoli Hahniani, 1905, pp. 30–32, 134–35.

¹⁶ Heine, *De l'Allemagne*, op. cit., p. 70; id., *Elementargeister*, op. cit., S. 47.

¹⁷ 高橋健二訳『アンデルセン童話全集』第3巻、小学館、1980年、240–249頁。

わりをかげろうが飛びまわっている。かげろうの命はすぐに尽きてしまう。樫はそれを気の毒がった。かげろうは樫に語った。どんな命もそれぞれの生をいつくしむ。そしていつか永遠のなかに帰っていく。それは時間の長さには関わりないのだと。

やがて季節はめぐった。樫の木は冬の眠りについた。クリスマスのまえの夜、荒れ狂う嵐のなかで老いた樫は美しい夢を見る。長い年月のあいだのできごとが、めくるめく目のまえを通りすぎていった。そのとき、樫は新しい命が胎動するのを感じた。それは細い根の先へとひろがり、高い枝の先へも登っていく。光につつまれ、喜びにみだされながら、自分の体が大地からはなれていく。……樫の木は音をたてて雪のなかに倒れた。

嵐はしずまった。朝の光がさしてきた。教会の賛美歌が森にひびきわたった。

——この最後の情景は何を物語っているのだろうか。異教の終焉か。新しい信仰の夜明けか。

聖なる木の時代は過ぎ去った。目に見える生き物と、目に見えない生き物がかつてはともに暮らしていた。それは理性の時代ではなかったかもしれない。ましてや科学の時代ではなかった。しかし人々の想像力は今とは比べられないほど解き放たれていたのではないか。見えないものをずっと身近に感じていたのではないか。そうした時代はもはや過ぎ去ったのである。

西洋でも日本でも、妖怪はかつて森がそこかしこにあったころの記憶につながっている。心細いけれど穏やかだった暮らしの、なつかしい記憶につながっている。そこにこそ妖怪が存在する場所がある。

人は妖怪に何を求めたか。妖怪の存在理由とは何か。

あえてそれを問うならば、「現在の否定」ということがひとつには考えられよう。私たちは迷信とわかっていることにさえ、時としてあらがうこともできずにいる。それがむしろ人としてありがちな姿であり、世のつねであつたりもする。迷信におびえ右往左往するなどというおよそ時代遅れの感覚が、めまぐるしく時代が動いていくなかで、かえっていとおしくさえある。妖怪がいなくなる理由もそのあたりに求められるのではないか。